

福祉協力校だより

平成18年1月17日発行



福祉のつどい 意見発表



飛騨市福祉のつどい
神岡町公民館



飛騨市健康と福祉のつどい
古川町総合会館

福祉協力校とは？

飛騨市社会福祉協議会では、小学校・中学校・高等学校の児童・生徒がボランティア活動や、身近かな福祉活動の中で、社会福祉への理解と関心を高めること、また、社会奉仕や社会連帯の精神を養い、家庭や地域の福祉の心を深めるような教育の実践を行うことを目的として福祉協力校を指定しています。指定されている12校では、下記のような活動を、当協議会と連携をとりながら実施しています。

具体的な活動は？

1 広報・啓発活動

- 講演会や福祉映画会、展示会等の開催
- 体験作文、学校新聞等の作成や配布
- 福祉体験発表会
- 標語の募集



2 調査・研究活動

- 児童・生徒に対する福祉・道徳意識調査
- 地域における福祉実態調査



3 体験学習を目的とした実践活動

- 社会福祉施設等への訪問活動、交流活動
- 社会福祉体験活動(手話、点字、車イス体験など)



4 地域一般での訪問・交流体験活動

- 老人ホーム等への慰問活動
- 年賀状、絵手紙の送付
- 給食サービスボランティア活動



<福祉協力校一覧>

飛騨市立山之村小中学校・飛騨市立神岡小学校・飛騨市立神岡中学校
飛騨市立古川小学校・飛騨市立古川西小学校・飛騨市立古川中学校
飛騨市立河合小学校・飛騨市立河合中学校
飛騨市立宮川小学校・飛騨市立宮川中学校
岐阜県立吉城高等学校・岐阜県立飛騨神岡高等学校

福祉体験

活動の一環として、夏休み、土曜日等を利用して、ワークキャンプ（施設体験学習）の実施、福祉ボランティアとの交流を通して、一人暮らし老人、高齢世帯への給食サービス及び配食サービスの実施や、福祉の体験学習として、車イスの体験、インスタントシニア体験などを実施しています。



福祉に関する意見発表

平成十七年十一月六日(日)、古川町総合会館において「飛騨市健康と福祉のつどい」が、また、十一月二十日(日)には、神岡町公民館において「飛騨市福祉のつどい」を開催いたしました。そこで、福祉協力校として指定していただき、各小中学校の児童・生徒の皆さんに福祉に関する意見及び標語の発表をしていただきました。今回の「福祉協力校だより」では、福祉に関する意見発表を掲載させていただきます。なお、標語につきましては、十一月に全戸に配布しております。また、飛騨市の「広報 ひだ」十二月号にも掲載されておりますので、ご覧下さい。

『本当のつながりとは』

古川小学校六年

近藤 瑛里

私は、お母さんの仕事を見て福祉に興味を持ちました。私のお母さんは、前まで和光園で、お年寄りの食事を作っていました。だからお母さんは家で『お年寄りの方がもっとおいしく食べやすいようになるには』などと考えながら勉強して作っていました。その中でも、具合の悪い方の食事は、細かくきざんであり、つぶしてあり、健康な私には、食べる気がしませんで

した。でも、お年寄りの方にとっては、大切な栄養なんだなあと思いました。私達は当たり前前に食べているけど、食べたくても食べれない人もいます。そう思うとしつかり感謝して食べたいと思いました。そんな時、総合学習がありました。私はいろんなコースの中から、福祉コースを選びました。私はすごくいいチャンスで福祉の仕事について知る、いい機会だなあと思いま

した。そんな矢先、給食サービスボランティアに参加できる事になりました。まずお弁当と一緒にだすしおり作りをしました。しおりというのは、お年寄りの方に読んでいただく短い手紙の事です。私は、読んで笑顔になつてもらえる事を、想像しながら、楽しく書きました。次にお弁当作りです。おいしく食べていただくために、清潔に注意しながら作るように教わりました。

給食センターの方が季節に合った食材を選んで工夫しているのが分かり、さすが、プロだなあと思いました。今回は、作ることが出来なかったけど、盛り付けを手伝う事が出来て、私なりに喜んでもらえるように一生懸命作りました。このお弁当を開ける時のお年寄りの方の喜ぶ顔を見ると、自分もうれしくなりました。ボランティアというより自分があるために、やれたという自信がついて、うれしかったです。

次に体験したのは『さくらの郷』での、介護の体験です。私は、初めてお年寄りの方とじかでふれあいました。まず、お年寄りの方の過ごし方について聞きました。私の知らない



い事がたくさんありました。そして車椅子の使い方などを教わり実際に、押ししたり、乗ってみたりしてみても、初めて、介護される方の気持ちが分かりました。その後、各フロアに分かれました。私は、三階を担当させていただきました。あいさつをしたら、もう仕事は始まっています。

まず、お年寄りの方の部屋を回って、お茶を飲ませてあげます。糖尿病の人、いろいろな障害を持った人がみえました。私は、初めての体験だったので、声が小さくて注意されたけど、声かけは、心がけてしっかりとやりました。その後も、何をしていたのか、

分からない時もあったけど、自分から聞いて進んで仕事もやれました。シース交換など初めての体験でしたが、お年寄りの方が「ありがとう」などと声をかけてくれた時の事は、忘れられないほどうれしかったです。私は、慣れない手つきで、少しでも、役に立てるように頑張りました。いろいろな仕事をしていると、昼の食事になりました。私は手の動かないお年寄りの方をサポートしました。いろいろな食べ物を順番に食べさせてあげ、一品ずつ「これは、何だよ。」と話しかけてあげました。

これは、お年寄りの方が何を食べているかわからないので、しっかりと声をかけて安心させてあげることが大事だと学びました。いろんな方がみえる中でも、手先の器用な方もみえ、さすがが人生の先輩だなあと思いました。

最後に、みなさんは、中村久子さんのことを知っていますか。久子さんは岐阜県高山市に生まれたそうです。久子さんは、小さいときから、障

害を持ち手足がありません。お母さんに人は働くために生まれてきたのだとしつけられ、針に糸も通せたそうです。久子さんはくじける事もあつたけど、何事もあきらめず、努力すれば出来ないことはないという事を教えてくれたような気がします。

私、健康な体をもらって何でも、挑戦しようと思えば出来るので、今までの体験を生かし、困った人や、助けを必要としている人を見かけたから、自分まず何が出来るかを考え、行動出来る、自分になりたいです。

これかからもいろんな方と出会って、優しい気持ちになれたらいいなあと思います。

『夏休みの福祉体験をおえて』

古川小学校六年

野田奈々子

私は、夏休み中に二つの体験をしました。一つ目は、給食サービスポランティアです。二つ目は、宮城保育園での幼児とのふれ合い学習です。給食サービスポランティアというのは、総合会館で昼食を作って、お年寄りの方に届けるという仕事です。私は、最初にお弁当と一緒に届けるしおりを作りました。そのあと、盛り付けをしました。その時、二つの気持ちがありました。

一つ目は、お年寄りの方がどんな顔をしてくれるのか楽しめという気持ちです。二つ目は、大変だし、お年寄りの方は、喜

んでくれるのかなあという気持ちでした。

担当の方と西小の人と私の三人で届けに行きました。一人目の所に着いた時は楽しみの気持ちしかありませんでした。そして、呼び出しボタンを押して「こんにちは」と入っていくと、ニコニコとした顔で出てきてくれてとてもうれしかったです。

私たちのグループは、配る人数が多かったけど、みんなニコニコして出て来てくれてうれしかったです。また、「ありがとう」と言って受け取ってくれてうれしかったです。配り終わって帰ってきてから、作った昼食

を食べました。みんなおいしいと言ってくれたので、おいしい料理が作れてよかったなあと思いました。この日は、思い出に残る日になって、本当によかったです。

七月二十六日と八月十九日には、宮城保育園に行きました。七月二十六日には、年少の『いちご組』を担当させていただきました。早朝からみんなを楽しみに待っていると、次々、幼児がやってきました。

一人の女の子が「お姉ちゃん、一緒に遊ぼう」と声をかけてくれました。とてもうれしかったです。九時三十分になると、みんな教室に戻ってきました。そして朝の会をやりました。朝の会が終わると、年少だけゆうぎ室へ行って朝の体操をします。みんな元気が百倍でビックリしました。

また、教室にもどって今度はぬり絵をしました。みんな上手にぬれていて、すばらしい作品です。歌を歌ったりもしました。終わって給食の時間になりました。幼児の食べる給食は、小学生が食べる分の約二分の一くらいで、少ないなあと思いました。みんなが食べ終わると、次はお昼寝の時間です。私は六人の

子を寝かせることができて、なんだかとてもうれしい気持ちになりました。みんな気持ちよさそうに寝ていました。二時三十分起床なのに、ほとんどの子が二時二十分ごろに起きていました。二時三十分になってもまだ寝ている子もいました。

私が起しても、なかなか起きませんでした。起きている子と一緒におやつを食べました。とてもおいしくて、調理師さんの心を感じました。三時三十分ころになると、保護者の方が迎えにきました。三人くらいの子が「お姉ちゃんバイバイ」と声をかけて、手を振った。

てくれてうれしかったです。

八月十九日は、年中の『うさぎ組』を担当させていただきました。七月の日程とほとんど同じでしたが、子供たちが一番楽しみにしているプールに入りました。私は、足だけ入りました。なぜかと言うと、子供たちの安全第一だからです。

あと年少とポディーペインティングというのもしました。これは、体に絵の具をつけて遊ぶ行事です。私たちで、みんなの体に、ハートや花など、いろいろ書いて、みんなをカラフルにしてあげました。その後は、プールで絵の具をおとしました。プールがきたなくなっていたので、みんなこれだけ元気に遊んだんだということがよく分かりました。終わってから、給食の時間になりました。

みんながおいしそうに食べている姿を見て、元気で遊んでくれたんだなあとうれしく思いました。夏休み中にたくさん思いい思い出が残って良かったと思います。幼児のこともよく知れたので良かったです。もつと近くの子たちと遊ぶ時間を増やしたいと思いました。また、宮城保育園に行って体験学習をしたいなあと思いました。



『いつかは赤ちゃんにもどるのかな?』

古川西小学校六年

村山 友歩

私の家は、床屋さんです。ある日、寿楽苑というお年寄りの施設に頭をかりに行くことになりました。私もお手伝いをしに行きました。私は初めて行ったのですが、迷子になりそうなくらい、広い施設です。寿楽苑には、車いすの人や寝たきりの人や、にんち症の人などいろいろなお年寄りがたくさんいました。

まず、最初に髪の毛を切ったおばあちゃんは、車いすで体が思うようにうごかなかったのでも、私がささえていたけれど、



すごく重たかったです。二人目のおばあちゃんは、小さいころの歌を歌っていて、楽しいおばあちゃんでした。子どもの頃の自分に戻っているのかなあと思いました。次のおばあちゃんは、じつとしてられないみたいで私が頭を持っていくと、いやがって、つねってきたりしました。その時は、びっくりしました。言っても言うことを聞いてくれないので、子どもみたいだなあと思いました。次は、自分の足で歩けるおじいちゃんでした。その日は、家族に会えるのを楽しみにしているということでした。こんなに元気なのに家族と一緒に住めないのかなあと思いました。

あと、人形を自分の子どものように、だっこしているおばあちゃんや、ヘルパーの人とずっと手をつないでいないときみしいおばあちゃん、ずっと独り言を言っているおじいちゃん、どこかへ行ってしまおうので、目がはなせない人、いろいろなお年寄りがみえました。私が一番たいへんだったお手伝いは、寝たきりのおじいちゃんや、背中を支えることで、すごく重かったことです。ヘルパーの人たちは、毎日、食事の世話や、お風呂に入れてあげたり、身の回りの世話をしてくれて、お助けマンみたいな人だなあと思いました。本当に大変な仕事だと思います。

私はいろいろなおじいちゃんやおばあちゃんを見てみて「人は赤ちゃんに戻っていくのかなあ。」と思いました。こういうおじいちゃん、おばあちゃんがたくさんいるなんて、初めて知りました。そして犬もいました。私が「犬がなんでいるの?」とお母さんに聞いてみると「犬は、おじいちゃん、おばあちゃんのおさみさをなくして元気づけてあげるのかなあ」と言いました。おじいちゃん、おばあちゃん、家族とはなれて暮らしているのでも、さみしいだろうなあと思いました。

『給食ボランティアをして』

河合小学校六年

上見真里佳

私は、夏休み中の八月五日に『すこやか館』で給食ボランティアをしました。給食ボランティアに参加した理由は先生に「やってみないか」と勧められたことと、お弁当を作り、それを配り、お年寄りに喜んでもらいたかったからです。一緒に給食を作った人は『飛まわり会』という、健康に良い食生活を目指しているグループの方たちです。このようなグループは全国にあり食生活改善連絡協議会というそうです。飛まわり会の方たちは、毎月一回お年寄りに、お弁当を配ってみえます。

夏休みに私達、小学生が給食ボランティアを体験するのは、栄養のバランスの良い食べ物や食べ方を知って、これからの生活に生かすこと、そしてお弁当をお年寄りに配ることによって、ふだんあまり会わ

りの役に立てることを見つけて、自分でできることをやっていきたいです。

このこないおじいさん、おばあさんと知り合いになれるからだと思っています。

私は、給食ボランティアをして、初めてお年寄りを大切にしている活動があることを知りました。お弁当のこんだても、お年寄りが食べやすいようにいろいろ工夫がされていました。

例えば、ツナとカボチャのコンソメでは、カボチャをすりつぶして、とてもやわらかく調理していました。インゲンのゴマあえでも、私が食べるよりも、よく煮てやわらかくしました。血液の流れを良くするためにゴマを使ったりするそうです。塩分が多いと、血圧が高くなるので、塩分は少なくしているということも分かりました。毎回、飛まわり会の人達は、常にお年寄りの人達のことを考え、体に良い食べ物や、食べやすいやわ

らかい物を作っています。

給食の材料も全部、河合で取れた物を使用してあるので、添加物も入っていないし、とても安全なお弁当を作っている事が分かりました。飛まつり会の人達と話しながら調理をしたのは、とても楽しかったし、食べ物の栄養バランスの事も理解できて良かったです。

そして、お弁当が完成したら、稲越方面に配る人と元田方面に配る人と二人ぐらいつ別れました。私は、民生委員のおじさんと元田方面へお弁当を配りに行きました。一軒目の家へ行く時、八十歳くらいのおばあさんでした。とても楽しみに待っていてくれたようで、うれしそうに顔で「いつもすいません。ありがとうございます。」とていねいにおじぎをして、お弁当を受け取ってくれました。二軒目へ行くと、次は六十過ぎのおばあさんでした。おばあさんの家へ行くとおばあさんは、犬を連れて外で待つてみました。私は「これは、私達が作りました。どうぞ食べて下さい。」と一言でお弁当を渡しました。このおばあさんもうれしそうに笑っていました。三軒目は玄関に入ると八十過ぎのおばあさんでし

た。おばあさんは、玄関で待つてみえて、お弁当をわたすとニコしながら、受け取ってくれました。私は、お弁当を配つてみて、行く時は、とてもきちょうとしたけど、配り終わると、やって良かったなあと思ったし、うれしそうに喜んでいて顔をみたら、私もとてもうれしく思いました。飛騨市や河合町でも思っていたよりも一人暮らしのお年寄りが多く、一人暮らしのお年よりは月に一回のお弁当や配りに来る人達と話ができることを楽しみにしているのでも、元気に過ごせるんじゃないかなあと思いました。

私は飛騨市や河合町の中に、



すばらしい活動があることを初めて知りました。これからもボランティア活動に積極的に参加して、いろいろなことを体験し、自分ができることで喜んでもらえることをやっていきたいです。私は、河合町に引越してきて間がないので、河合町のお年寄りの方と話したことがありませんでしたが、この給食ボランティアに参加したことで河合

町のお年寄りとおふれ合うことができ良かったです。学校へ行く時など町でお年寄りとお会つたらその時は、私の方から「おはようございます。」と声をかけてたくさんのお年寄りとお友達になりたいです。また、運動会や学習発表会でも、たくさんのお年寄りを呼んで、おふれ合う機会が増えればいいなあと思います。

『おばあちゃんの涙とぼくの夢』

宮川小学校六年

小 邑 太 志

ぼくが『しましまハウス』に行つた時、おばあちゃんは涙を流しました。『しましまハウス』というのは、体の不自由な方やお年寄りが生活しているところです。『しましまハウス』で生活しているおばあちゃんを車イスにのせて外を散歩しました。車イスを押している途中におばあちゃんが泣きはじめました。最初のうちはなぜ泣いているのか分かっていませんでした。でも押しているうちに分かってきました。

子供に押ししてもらえないことなので、う

れしくて泣いていたんだなとぼくは思いました。この時、ぼくは、こんなに喜んでうれしいと思いました。

お年寄りの人たちは、いろんな人や子どもとおふれ合うことがそれほど、うれしいことなんだと、その時、初めて気づきました。それから、お年寄りや体が不自由な人にとつて、もちろん人との関わりも大切だけど、施設や道具の使いやすさも同じくらい大切だと分かりました。

今回、ぼくが『しましまハウス』に見学に行くことにな



つたのは、国語の『みんなで作る町』という学習がきっかけでした。その学習で町のいろいろな施設にユニバーサルデザインをさがしに行つたのです。ユニバーサルデザインというのは、体が不自由な人のために使いやすいようになつていく施設や道具のことです。ぼくの夢は大工さんなので、そのような建物の作り方にきょうみがありました。

『しましまハウス』に入ると、玄関には、スロープがありました。これは、ユニバーサルデザインです。中に入つてしまうとエレベーターや手スリがありました。手スリはかべに持ちやすい高さの所に

たくさんついていました。トイレなど段差がある所にもスロープがつけてありました。

二階には、お風呂と『しましまハウス』にきているおじいちゃん、おばあちゃんが寝泊りする部屋がありました。部屋を見ていたら、Mさんというおばあちゃんが話をしてくれました。ぬり絵や、さしこを見せてくれました。

とつてもきれいに色をぬったり、布をぬってあって、ぼくや先生まで、すつごくびつくりしました。リハビリや指先の機能がおとろえないようにやっているということでしたが、その時頃は「器用だな、まねしたいな」と心で思いました。

さて、ぼくがおばあちゃんと散歩している時、車イスが段差にはまってしまつて、ぼくはそこから抜けることができませんでした。そこで、『しましまハウス』で働いている人に「車椅子の前を持ち上げてやるとぬけられるよ」といわれてやってみただけ重たくて抜けられませんでした。この時頃は『しましまハウス』で働いている人はかなり力が必要なことが分かりました。

『しましまハウス』に帰るとスロープがありました。スロープをのぼるときひつかかって、登れませんでした。スロープでものほりにくいことが分かりました。この時、ぼくは、もつと昇りやすいスロープがあるといいなと思いました。それに、おばあちゃんたちが元気でいてほしいと思いました。

ぼくの家のトイレもユニバーサルデザインがあります。洋式のトイレだし、ふたが自動であくようにすることもできます。それにトイレに段差

はありません。国語の授業をやつて自分の家にもユニバーサルデザインがあることがわかりました。

ぼくの夢は大工さんです。もし、大工さんになれたら、家を建てる時、体の不自由な人たちのために使いやすい、ユニバーサルデザインがたくさんある家を作りたいです。

これからも、おじいちゃん、おばあちゃん、家族、友だちを大切にしていきたいです。それにお年寄りともっと親しみたいです。

『ボランティア活動を通して』

古川中学校三年

吉澤 歩美

私は今までに、いろいろな福祉のボランティア活動をしてきました。それは、将来、福祉関係や看護師のような、人との関わりを通して、少しでも人のためになるような仕事をしたいという夢があるからです。

私が初めて、ボランティア活動をしたのは、小学校五年生の時の給食サービスでした。給食サービスというのは、ひとり暮らしのお年寄りの方などにお弁

年寄りの好きそうな煮物や、やわらかそうな物をつくってみえ、その心が伝わってくるようでした。その時に、「人のためになることはよいことだなあ。」と思いました。このことをきっかけで、次の年からは、自分から給食サービスに参加するようになりました。

中学校に入ると、ちびっこランドやお手紙ボランティアなどといった、小学校までと違うボランティア活動も行いました。ちびっこランドでは「小さい子はおかしいし、一緒に遊ぶくらいなら簡単だ。」と思っていたけど、中には、なかなか話してくれない子や、泣いてしまう子

もいて、どう接したら良いかわからず困ってしまいました。小さい子の相手をするのは、「やさしそうで実際はむずかしいなあ。」と思いました。

お手紙ボランティアでは、独居老人の方とおはがきを通してコミュニケーションをとることができました。返事のはがきが家に届いた時は、「ありがとう。あなたも頑張つて下さいね。」と書いてあったのがうれしかったです。

二年生、三年生の夏休みには、母の職場である特別老人施設『さくらの郷』へ行きました。二年生の時は、掃除や洗濯の仕事を手伝わせてもらいました。広い廊下を掃除機をかけたり、靴箱を拭いたり、たぐさんの洗濯物をたたんで、各フロアーに届けたりと、次々と仕事がありました。「お年寄りの生活を陰で支えてくれる大変な仕事、掃除ひとつにしても、きれいなことが当たり前、その当たり前を保つことは本当に大変なことだ、掃除の方には教えられないことがたくさんあり頭が下がる。」と母が言いました。

又、掃除のおばさん方にも親切に教えてもらえ、「将来、自分のためになるからね。」と



励ましてもらいました。お年寄りの方からも、「ご苦勞様、えらいね。」と声をかけてもらえたり、他の職員の方にも励まされ、その言葉全部がうれしくて十日間通うことができました。そして、今年の夏、三年生という時期を迎え、進路を考える意味でも「将来、本当にこういった仕事をやれる自分であるか。」を少しでも知るために、お年寄りの生活の場に関わらせてもらいました。

皆さんにお茶を出したり、食事の配膳をしたり、そしてその片づけをしたり、時にはお年寄りの方と体操をしたり、又、週一回は必ず行うというシーツ交換の手伝いもさせてもらいました。シーツ交換では、しわなくきれいに整えることが難しかったです。介護の必要なお年寄りの方も、片方の手しか使えないといった片麻痺の方や、自分では歩けない方、同じ事を何度も言ってみえる方、耳が遠くジェスチャーや筆談でしか物事が伝えられない方など、身体の状態もひとりひとり違うことを知りました。

ある時、私の手をずすと握ったまま離さないのです、どうしたらいいのか困ったことがありました。

した。お年寄りの方と何を話したらいいのかわからなくて、職員について歩くばかりの時もありました。「ここでは、そういったお年寄りの生活を、心も身体も支える大切な仕事ではあるけれど、私達もそんなお年寄りの方に支えられているんですよ。」と職員さんに言われ、とても驚きました。それは、「ありがとう」との言葉や、「あなた

『笑顔求めて』

古川中学校三年

蒲 希世子

私は、祖母に「希世子、デイサービスに行ってみるか。勉強になるよ。」と誘われ、一緒に行ったことがきっかけで、福祉活動に興味を持ち始めました。

私の祖母は以前、デイサービスセンターへボランティアとして、お年寄りの話し相手や介助のお手伝いなどをしていました。私は祖母に誘われるまで、ボランティア活動などほとんどしていませんでした。そのため、その日も祖母に言われて、ただ何となくついていきました。デイサービスでは、地域のお年寄りと体操をしたり、ゲーム

のお陰で」といった言葉、うれしそうに笑顔などなど、いろいろなんだそうです。私もこれからのいろいろな勉強をして、そんな風に思える仕事が出来たいと思いました。ボランティア活動を通して私が学んだこと、それは将来のために人の役に立てる自分になることです。そのためにこれからも頑張りたいと思います。

などをしたりしました。祖母に「お年寄りの人と話しておいで、喜ぶぞ。」と言われましたが、初めての人と話すのが苦手な私にとっては、何を話したらいいのかわからず、自分から進んで話しかけることができませんでした。

私が唯一できたのは、移動する時に、車椅子を押してあげることにくわいでした。私は、「デイサービスに来た意味があるのかなあ。」と思いました。でも、車椅子に乗っていたおばあさんが「ありがとう。」と笑顔で言うて下さった時は、うれしくて

ついでに笑顔になりました。このことがきっかけとなって、私は、ちびっこランドや給食サービス、そして古川祭の時に行われる美化奉仕作業などのボランティア活動に参加するようになりました。ちびっこランドでは、たくさん子ども達に積極的に話しかけたり、遊んだりして仲良くなることができました。

それは、私は子どもが好きで将来、保育士になりたいという思いがあったからです。だから、ボランティアに参加したというより、子どもと一緒に楽しい時間を過ごすことができました。子ども達の笑顔は、とても無邪気でかわいく、見ていてもあきませんでした。「子どもの笑顔って素敵だなあ。」とつくづく思いました。

次に、給食サービスに参加しました。一番に残っていることは、お年寄りにお弁当を届けた時の事です。どのお年寄りからも、「ありがとう。ごっつおさん。」と言われたときは、「一生懸命お弁当を作って良かったなあ。」と思いました。ここでもまた、お年寄りの素敵な笑顔を見ることができました。最後に、美化奉仕作業で、ゴ

ミ拾いのボランティア活動に参加しました。古川祭ということもあり、出店などから出るゴミも大変多く、落ちているゴミを拾って仕分けするのが大変でした。しかし、ゴミをそのままにしておいたら、もつと町が汚くなるからと思いい、最後まで頑張つてゴミを拾いました。この活動に参加して、古川祭を支える人たちの大変さや大切さを知ることができました。

私は、これらの体験を通して気づいたことがあります。それは、ボランティアをする人もしてもらう人も、いつも



笑顔だということです。私は、たくさんの人と出会い、多くの笑顔から、元氣や勇氣、そして人を思いやる優しさをもらうことができました。

人に誘われて始めたボランティア

『ワークキャンプに参加して』

河合中学校三年

政井 達也

私は将来、福祉の仕事に就きたいと思っています。そこで、今年の夏休みに、福祉のワークキャンプに参加して、福祉の仕事を学ぼうと思いました。今までも、福祉施設や保育園でボランティア体験をしていましたが、望みを持って参加したため、今年の体験は自分にとってすごく勉強になりました。

ワークキャンプの一日目は、主にインスタントシニア体験とビデオ視聴、さらに視覚障害体験をしました。シニア体験では、道具を使ってお年寄りの立場になりました。実際に体験してみると、一つ一つの動作が大変でした。

次に、ビデオ視聴では、身体が不自由な人との接し方を学ぶ事ができました。一番、心に残

りていますが、今では自分から素敵な笑顔を求めて、進んで参加できるようにになりました。これからも機会があったら、是非ボランティア活動に参加したいと思います。

っているのは、身体が不自由な人に対して差別や偏見を持たないということ。これは、とても当たり前のことであるけれど、忘れてはならない大切なことだと思えます。そして、この当たり前のことを意識して、自分でできることがあれば、積極的に声をかけて手助けしたいと思えました。

視覚障害の体験では、アイマスクをつけて、まったく目が見えない状態になりました。この状態では、歩くのが大変で、怖さも伴いました。体験してみても、目の不自由な人にとって、安全に外を歩くことが大変だということ。点字ブロックなどをきちんと設置してもらいたいと思いま

した。

二日目は、デイサービスを利用されている方々と接しました。車に乗り、迎えに出かけた時には、利用者の乗り降りなどを手伝うことが十分にできなく、今日一日大丈夫かなと心配になりました。しかし、利用者の方から話しかけてきてくださり、だんだんと接することが楽しくなってきました。利用者の方は、接している時にずっと笑顔で応えてくださるので、うれしい気持ちになりました。

ワークキャンプでは、障害者や高齢者の立場に立った体験や、実際に高齢者の方と触れ合う体験が、たくさんできました。



この体験を通して学ぶことができた『相手の立場に立って物事を考えることの大事さ』を、持ち続けたと思います。そして

『交流を通して気づいたこと』

宮川中学校三年

水上 和奏

去年、私の通う宮川中学校では、生徒会活動でお年寄りの方々との交流に力を入れていました。その交流で私が行ったデイサービスセンターに一人の足の不自由なおばあさんがいました。そのおばあさんとお会い、お話をしたことで私にお年寄りの方に対する気持ちの変化が表れました。

交流を生徒会で計画された時、私は正直、あまり乗り気ではありませんでした。私は、お年寄りの方と話すのが苦手、お話しをして交流をしろと言われても私とお年寄りの方との話題が合うかどうかも分からず、結局、不幸なままで第一回目の交流の日をむかえました。案の定、話がかみ合わず、ほとんど沈黙状態のまま交流を終えました。終わったときは「やっと終わった。」という

気持ちの反面、『おばあさんはこの日を楽しみにしていたかもしれない思いをさせてしまっ』と反省しました。

第二回目の交流会の日。私は前回の反省から、今回はおばあさんでも分かるような内容を考えて、笑顔でゆつくりと話そうと決めていました。その結果、今回は話はずみ、おばあさんが楽しそうに笑って下さいました。『ごく普通の話なのに』と思うと、私は不思議と幸せな気分になりました。そしておばあさんが最後に「ありがとな。楽しかったよ。」と言って下さいました。その一言で、また会いたいと思うようになりました。交流をするまで「お年寄りは苦手」と思っていた私は、いつの間にかお年寄りとの会話がとても楽しみになっていました。た



った二回の交流でこんな気持ちの変化があったことに、自分自身、大変な驚きでした。

私には、今、七十五歳の祖父と六十八歳の祖母がいます。二人とも少し耳が遠く、何回も同じ事を繰り返す言わなければいけない事にいらだち、強くあたっていました。それだけでなく腹の立つことがあると、何も罪のない祖父にいきなりをぶつけることもありました。だけど交流をしてから私は反応を変えようと思い始めました。それから祖父や祖母を見てみると、いつも気づかなかった優しさに気づきました。

祖父は、私が学校に行く時間になると、あまり思い通りに動かない足で玄関まで歩いてきて、私に「行ってらっしゃい。」

ケガしように気をつけてこいな。がんばれよ。」と言って、毎日、見送ってくれます。祖母は、私が居間で寝てしまった時、枕を持ってきてくれたり、毛布をかけてくれたりします。

そんな優しさに気づくたび、私は強く当たってしまったたり、きつい言葉を言ってしまったことを反省し、これからは優しく接しようと思うようになったのでした。こんなことは考えたくないけれど、祖父や祖母は、私といつまでも一緒にいられるわけではありません。いつかは別れが来てしまいます。だけど、一緒に過ごしていられる日々の中で、私は祖父母に対し、毎日、優しく接しようと思います。

デイサービスセンターで一人のおばあさんに出会えたことで、私は大きく変わることができました。これからは学校行事の一環としての交流だけではなく、自分から進んでふれあいボランティアなどに参加したいです。そして、お年寄りの方にとってつらい事は何か、うれしい事は何かを学び、つらいことは支えてあげて、お年寄りの方にもいつでも頼ってもらえるような人になりたいです。

お年寄りの方と話せる機会を

生徒会で作ってもらって、とても良かったです。お年寄りの方との交流で、私は心が通じ合うことの楽しさを知りました。どれだけ年齢差はあっても、心は通じ合うということがわかりました。高齢化社会の現代、一

『父の仕事』

神岡小学校六年

青山 萌香

私の住む神岡町には、特別養護老人ホーム『たんぼぼ苑』という福祉施設があります。

たくさんのおじいさんやおばあさんが生活しています。私の父は、『たんぼぼ苑』にいるおじいさんやおばあさんの悩みを聞いたり、自宅で療養している方やその家族の人たちの相談のり、どんなサービスができるか教える仕事をしています。

父がどうしてこの仕事にいたのか聞いたことがありません。自分にどんな仕事ができるんだろうと考えた時、いとこの世話をしている叔母の事が浮かんだそうです。父のいとこは、小さな時、「脳性マヒ」という病気になり、ねたきりになってしまいました。

人暮らしのお年寄りの方も増えています。そういう方々に積極的に話しかけて、少しでもお年寄りの方が楽しいと思えば、笑顔でいて下さるような、そんな温かい社会を作らなくては、と思っています。

家に遊びに行き、いとこの世話をするおばあさんの姿を見たことが、この仕事につくきっかけになったと言っていました。おばあさんが、いとこの着替えから、食事、下の後始末まで、たくさんのお事をしている様子を目にして、家族が大変な思いをしているんだと思ったそうです。神岡に来て、『たんぼぼ苑』の仕事があるの聞き、すぐに申し込んだのだそうです。

私は、父の仕事を見ていて、毎日、帰りが遅いし、宿直が一月に六回、土曜、日曜、休日も日直で『たんぼぼ苑』に行かなければなくてはならないこともあります。そんな父の姿を見て、「大変だなあ。」と思っています。父はこの仕事について聞いた



ところ、「とてもむずかしい仕事だし苦労も多い。でも、たんぼぼ苑を利用してくださっている人やその家族の方々が『たんぼぼ苑』に来て良かった」と言われたり、笑顔で生活しているおじいさん、おばあさんを見て、どんな苦労も吹き飛ばし、この仕事を選んで良かった。」と言っていました。

以前、道徳の授業で「福祉とは何か？」という事を考えました。その時、一番初めに出た意見が「介護」でした。二冊の国語辞典で福祉という言葉の意味を調べたところ両方ともに「しあわせ、幸福」と書いてありました。私は、それまで、福祉は介護だと思っていましたが、それは、とてもせまい考え方なん

だと気がつきました。福祉とは幸せ作りです。

父たちの仕事は、おじいさんやおばあさんの世話をし、ゆつくり生活してもらうことだけでなく、家族の人たちにかわって世話をすることで、安心して生活してもらうことも大切な目的なんだと思えるようになってきました。

祖父が言っていたことですが、昔は「ちゅうけ」といって脳出血や脳梗塞で倒れたおじいさん、おばあさんが、家で寝ているのをたたくさん見たそうです。そんなことを思うと、今はたたくさんの施設ができて、家族の人たちは、安心できるようになっています。でも、父から聞いた話ですが、『たんぼぼ苑』に入る申し込みをしている人は、まだ、百数十人いるそうです。こんなにたたくさんの人が待っているなんて、びっくりしました。この人たちはどのように過ごしているんだろうかと心配になりました。

私たちも、いつかは老人になります。私は十二才ですが、自分のこととして真剣に考えていかなければならないと思います。

『おつきいばあちゃんと家族』

神岡小学校六年

小林 遥香

「もう、嫌になっちゃう、さつきも言ったのに…」

私には、ひいばあちゃんがいいます。私の家では、そんなおばあちゃんのことを『おつきいばあちゃん』と呼んでいます。おつきいばあちゃんは、私の家のすぐ隣に住んでいます。

おつきいばあちゃんは、年のせいで、もの忘れがひどくなっています。私は、おつきいばあちゃんが喜ぶだろうと思い、よく話し相手になってあげます。けれど、一分もたないうちに、



「なんやって?」と同じことを聞き返してきます。話し始めて

間もない頃は、「またか」と思いつつも、我慢して同じ話をしあげます。けれど、何回も何回も同じことが続くと、やはり、私も面倒くさくなってしまう「いいかげんにして!」と

いなくなるがあります。でも、家族はそんな私たちをにこにこと笑って見ているのです。ご飯もよく一緒に食べることがあります。でも食べていると突然「オラ、こんなもの食ったことない」と言います。

いつもおつきいばあちゃんのために、一生懸命、ご飯を作ってくれているおばあちゃんやお母さんは、そんなこと言われて嫌じゃないのかな…。私だったら、おいしかったものは絶対に覚えていられるし、忘れたりなんか絶対しない。それに、せっかく作ったのに、忘れられてしまっていたら悔しいです。

おつきいばあちゃんは、一人では生活できません。何をするかトントンカンでわからないか

ら、いつも家族の誰かが寄り添ってなくてはなりません。ほとんどが、じいちゃんとおばあちゃんがお母さんを見ているが、私のお母さんも、じいちゃんやおばあちゃんがお母さんを見ている時は、仕事を休んで、一日中、おつきいばあちゃんの面倒をみています。おつきいばあちゃんのために、自分の時間をけずってやりたいことも我慢しています。

今、私は、おつきいばあちゃんを嫌がって、つい、避けてしまったり、いい加減に話しを聞くこともあります。けれど、小林家のために愛情をいっぱいかけ、尽くしてくれた人だと思ふと、おつきいばあちゃんとは話したり、遊んだりして、一緒に楽しむことが、今の家族の中で私の役割なんだと思います。いつまでも、家族が、おつきいばあちゃんを囲んで、笑顔で明るくいられるといいなと思います。

『おばあちゃんの左手』

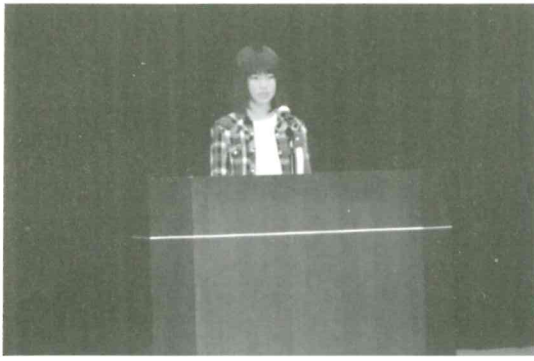
神岡小学校六年

梶野 茜

「おいしいーまた、作ってね。」おばあちゃんの作ってくれた「ほうば寿司」は、最高です。ほうばの葉も山からとってきて、一枚一枚おばあちゃんの手で洗います。ホカホカご飯に、竹の子やにんじん。さらに山椒の葉がはいっています。おばあちゃんも他にも、お赤飯や大福もちもつくってくれます。私たちのためにはりきって作ってくれます。ほうば寿司が一番です。

こんなにおいしいほうば寿司を作ってくれたおばあちゃん、わたしの自慢でした。でもそ

んな「ほうば寿司」を食べられなくなる日が来るなんて思いませんでした。おばあちゃんのお世話を一生懸命していました。おじいちゃんも時々、夜になると家から出ていってしまふ、おばあちゃんも夜中に探していくこともたくさんありました。わたしは大変だなあとおもいましたが、何もすることができません。おばあちゃんも年で結構えらいだろうに、おじいちゃんのために一生懸命がんばっていたので



す。わたしは「おじいちゃんのこと大好きなんだなあ。」と思いました。

そんなおばあちゃんが二年前、突然、脳梗塞で倒れてしまいました。倒れたと知った時は、とても驚きました。「大丈夫かなあ、死んでしまったらどうしよう：」おばあちゃんの様子が全くわからず、心配でなりませんでした。だんだん、おばあちゃんをみるうちに、おばあちゃんの右半分の体が自由に動かなくなったことに気づきました。「ええ：」

おばあちゃんは、右半身が麻痺し、言葉も全くしゃべれなくなりました。おばあちゃんのほうば寿司が食

べれない：」少し寂しくなりました。

一年前、おばあちゃんの大好きなおじいちゃんが亡くなりました。おばあちゃんは、とても悲しかったのですが、ただ涙を流すことしかできませんでした。その時のおばあちゃんは、自分の気持ちを声に出すことも字に書くこともできなかったのです。きつと、おばあちゃんは、大きな声を出して泣きたかっただろう、おじいちゃんと語りたかっただろう、だけど、おばあちゃんは涙を流すことができなかったのです。

おじいちゃんもいなくなり、自分の体も動かなくなつて、おばあちゃんは何日か、氣力を失いました。いつも行っていたデイサービスも休んだり、行ったとしても表情は暗く、よく泣いたりしていました。そんなおばあちゃんに、わたしはできるだけ笑顔で声をかけようと思いましたが、でも、何て声をかけたらいいかわかりませんでした。「あー。わたしはまた、おばあちゃんのために、何もしてあげられなかった。」と後悔しました。でも、おばあちゃんは決してくじけませんでした。車いす生

活になってからも、自分の力で一生懸命生きようとしています。デイサービスに行かない日も、少しでも歩けるように、市民病院でリハビリをしています。でももう、おばあちゃんの利き手だった右手は動きません。そんなおばあちゃんに「左手を使ってみたら」と勧めたのは、私の母でした。それからおばあちゃんは、一人でご飯が食べられるようになりたいと、左手でスプーンやフォークを使って食べる練習や、左手で字を書く練習を始めました。昼間も、

家の中で廊下を歩く練習をします。さらに、家族のために何かできないかと、洗濯物を左手だけで上手にたたんでくれます。でも食事一つするのも、おばあちゃんにとっては辛いリハビリなのです。やがてきれいな字とはいえないけれど、ノートに左手で字をかけるようになってきました。たとえ、半身不自由になつても、自分でできることを増やそうと、毎日努力しています。そんなおばあちゃんをみると、毎日の自主勉強ですら、もつとできるのに、「二ページやったし、もういいや」と面倒くさくなってやめてしまう自分が情けなくなってきました。おば

あちゃんの努力にすれば、比べ物にもならない、ちよつと努力すればできることなのに。思っていることや、伝えたいことがあつても言葉にできず、声に出して離せないおばあちゃん。わたしもだんだんそんなおばあちゃんの伝えたいことがわかって来たような気がします。それは、おばあちゃんの気持ちになつて、おばあちゃんの心で聞いてあげることが大切なんだと気づいたからです。これからもトイレのお世話や、はみがき

など、手助けをしてあげたいと思います。

私の家には、そんな頑張りやおばあちゃんがいいます。わたしも、おばあちゃんの支えになつてあげながら、おばあちゃんのように、何でもあきらめずに努力できる人間になりたいと思います。そして、そんなおばあちゃんに、今度はわたしが、おいしくはないかもしれないけど、ほうば寿司を作つてあげることが、最高のプレゼントになると思いました。

『看護師の母』

神岡小学校六年

岩崎 広泰

「あーお母さん、今日も夜勤か：」自分の母は飛驒市民病院の看護師をしています。母が小学校五年生の時に看護師になるという夢を持ち、努力を重ね、見事に現在のこの仕事をしているのです。母は今年の三月まで、病院の中でも「手術室」の看護師でした。

ぼくは、医師から「メス！」と言われれば、それを慎重に渡す、母の姿を想像すると「すごくカッコいいな。」と思つてい

ました。そんな母の姿に、ある意味で尊敬すら感じていました。そんな母が、四月から普通の病棟勤務に変わりました。それは母自身も望んでいたそうです。ぼくは手術室のカッコいい母のイメージがあつたので、残念でなりません。病棟での職務は、決して「楽」な仕事ではありません。何と言つても「夜勤」があります。それは、ぼくの生活までも変化を及ぼしました。母と話せない日があつたり、

夜勤の次の日は母が寝るために、家の中でも静かにしなくてはいいけなかつたり…。母自身も前に比べて何となく疲れ果てているような気がします。なぜそんな思いまでして「病棟」の方がいいのか？そんな疑問がぼくの心の中でどんどんふくらんできました。手術をするのがイヤになったのかな？病棟の方が給料がいいのかな？いろんな考えをしてみました。はつきりとした理由は見つかりませんでした。

ある日、ぼくは思い切つて母にそのことを聞いてみました。するといつもは家の中でセカセカしている母が、ゆつくりとそのことを話し始めました。

「私が病棟に勤めたかった理由は患者さんともっと関わりたいたいと思ったから。患者さんは、ほとんどの人が何らかの苦しみや悩みを抱えているの。だからそんな人達の思いを聞いてあげること、自分自身がどれだけでもその患者さんのためになれればと思つてね。夜勤も増えて大変だけど…。またよろしく頼むね。」ぼくはその母の言葉から「仕事に対して中途半端じゃない」、そんな母のすごさを感じました。また、母自身も仕事が好きで、そんな母を頼り

「私の夢」

山之村中学校三年

沖田 紗織

私には、夢があります。それは福祉看護師になることです。私の大好きなおじいちゃん、おばあちゃんにいつまでも笑顔で暮らして欲しいと思つたのがきっかけです。すなわち、私の大きな夢は、お年寄りの方に笑顔で暮らしてもらうことです。

私は、少しでもお年寄りの方と接するため、昨日と今年の夏休みにワークキャンプに参加しました。参加する前、



私は、施設にみえるお年寄りの方は、みんな元気がいいんだらうと思つていました。でも、私の接した方の中には、足が不自由だったりしてあまり動けない方もみえました。私は初め、そんな方々に、いざ話しかけてみようと思つてもどうやって声を掛けたいのか分からずに戸惑いました。しかし、私の方からあいさつすると、それだけでお年寄りの方はすごく喜んでくださつて、逆にいろいろな話を下さつたり、笑顔を見せてくださつたりしました。その時、私はすごくうれしかったです。

これからのことや、その施設で働いてみえる方の姿を見て、やはり人が幸せに暮らしていくためには、人と人との関わりがなくてはならないと感じました。そして誰もが笑顔で暮らせ

るためには、まず自分が笑顔でいることが大切なんだと思いました。

今、私は自分でできる簡単な、身近なことから始めようと思つています。近所の方に、笑顔であいさつをする、声を掛けるなどです。簡単にできると言いましたが、皆さんの中にも、声を掛けることに勇気がいるという人がいると思います。私も以前はそんな時、勇気が必要でした。でもワークキャンプで、私でもできるということを学びました。私が、率先して声を掛けていくことで、周りの人がそのことに気づいてくれるといいなあと 생각합니다。そして自分から、笑顔で声を掛ける人が増えれば、今よりもっと、笑顔があふれる生活になるのではないかと思います。

私は今後、笑顔を意識し、家族や友達、お年寄りだけに限らず、周りの人との関係を大切にしていきたいです。そして、もちろん、お年寄りの方に対して、笑顔で接することができると温かい心・気持ちをもち続け、お年寄りの方にいつまでも元気に暮らしてほしいと思います。

『福祉について思うこと』

神岡中学校三年

原田 優未

秋が深まり、こたつの季節が曾祖父母を思い出します。曾祖父母は私達姉妹をとてかわいがってくれ、いつも曾祖父は暖かいこたつにあたりながら小さな妹を抱っこして、私にお菓子をたくさんくれ、曾祖母は昔の話や昔の歌を覚えてくれました。私達は音痴な歌に大笑いし、それでも「笑うなよ」とテレながら、また歌っていました。その歌も知らず知らず覚えて、今は懐かしく思い出されます。

曾祖母が亡くなって六年になります。私が小学校四年の時でした。曾祖母は、脳梗塞になり、私達が楽しみにしていた会話、そして歌ももう歌えなくなり、食事も一人ではできなく食べさせてもらわなければならぬ状況になりました。

しかし祖母は、常に話しかけ

ながら、いつも平気そうに小さな体を精一杯使って、衣服を着替えさせたり食事のときもたくさん話しかけながら、笑顔で食べさせてあげていました。私はただ現実だけを見て、悲しいだけでどうしたら良いかわからず、祖母の陰で見守るばかりでした。

ある日、祖母と母がオムツを替えている所を見ました。赤ちゃんのオムツ替えとは違い、左右に向かってあつという間のオムツ交換になってうまいのだろうと思いました。母は曾祖母に「寒いで、はよしんと」と言うとうと曾祖母はニッコリ笑いました。「オムツを替える方は何でもなくても、替えられる方は本当にイヤなもの」と母はよく言うていました。介護とは、そういう介護される人の気持ちが大切なんだと、その時思いました。曾祖母は皆の必死な介護も空しく亡くなってしまいました。私は一日中、曾祖母の顔を何度も見ては泣いていました。しかし、祖母は、りんとしていま

た。それは思い残すことなく、十分な介護ができていたからだと思います。そういう祖母や母を見て私は尊敬し介護福祉士になり、もつといういろいろ勉強したいと思うようになりました。

中学校での職場体験は、飛騨寿楽苑、たんぼぼ苑にお世話になりました。職場を選ぶ動機は「真剣に考えて決めたこと」と自負していたものの、何もできず何も分からずただおどおどするばかりで、どうやって利用者の方達とコミュニケーションをとって良いのか、またどうやってスプーン一杯のおかゆを食べてもらえばいいのか分からず、ひや汗が流れ心臓の鼓動は大きくなり逃げ出したくなる程でした。しかし、何回か経験しているうちに、自然に言葉が出るようになりました。「今日は天気が良いですね。お昼の食事おいしかったですね。」

等と声をかけると、ただ「まづい」と言われてしまい、一瞬ドキッとされるものの、「エー、そうですか？美味しそうに食べられていましたよ」とまた言うとうと、今度は笑顔で応えてくれました。言葉がなくても、私には「やっぱり、おいしかったんだ」と利用者の方の表情を見て感じ

られました。コミュニケーションとはそういうもので相手の気持ちを受け止め考えて、受け答えするものだと思います。傾聴も大切、ゆつたりとした中で相手の事をよく聞き、どういう気持ちでいらつしやるのか把握する。これも大切な事だと思います。この「まづい」と言った方は私がどういう人なのか確かめていたのかもしれない。

「まづい」と言われて、私がどう対処するか、試していたのかもしれない。人が人に気を遣うという事は難しく、気を遣いすぎて傷つけることもありえます。その場その場に応じた対応が、本当に大切だと思います。母の仕事場にもたまに行き、



利用者の方といろいろな会話やクリエイション活動を一緒にすることがあります。利用者の方を見てみると、優しかった曾祖父母を思い出して懐かしく愛おしくなります。とても楽しく毎回、私が励まされて帰ってきます。

「また来てね」の言葉がとても温かく元気をいっぱいもらっています。私は、年をとると赤子に戻るといふ言葉を聞きますが、赤子になんて戻らない。何も分からなくなっても何もできなくても、立派に生きてきた方々に心から敬意をもちます。おばあちゃんの手にとつと私の手を重ねると、しわしわでこつこつで、しみだらけです。しかし私は、それを美しい手だと思えます。戦争を経験し、食べ物がない生活をされ必死に働いて生きてこられた証が、この手だからです。私はそつと手をさすり、「頑張ってきたんだね。」と心の中で話しかけます。ぎゅつとにぎり返してくれると、気持ち温かくなり、また新たに決意が生まれます。曾祖父母に何もしてあげられなかった悔しさをいつも心におき、介護福祉士への夢、希望をもち経験の積み重ねを明日への活力にしていきたいと考えています。

『福祉体験から学んだ事』

神岡中学校三年

松本 亜由美

私の将来希望している職業は、「介護士」ではつきりとした夢を持っています。介護士になりたいと思つたのは、二年生、夏休みの職場体験からです。二年生の初めの頃はお年寄りの事など全く考えていなくて、ただ適当に選んだ体験でした。しかし、お年寄りと話したり、接することがとても楽しく感じ、介護の仕事に興味を持ち始めました。そして秋にもう一度あつた職場体験にも介護を選び、たくさん学んでくる事が出来ました。夏休みの体験は、ただお年寄りの方と話したりするだけだつたけど、二回目の体験はお年寄りについて詳しく知りま

した態度で扱わず、一人一人のお年寄りを大事にしていました。見ているだけで伝わってきたのは、本当に介護士という職にやりがいを感じているからだと思えました。

た。学んだ事とは、「お年寄りは、私たちの人生の先輩で、経験豊富です。今は、年老いて認知症だったり、赤ちゃんのような考え方ができなくても、お世話させていただくという気持ちが一番大事にして接する。」という事です。

しかし、介護士という仕事は、決して楽な仕事じゃありません。老人を介護するわけなので、利用者車を椅子ベッド、浴槽などに移乗させる時は、結構、体力を使うし、年配という事もあつて相当気を遣うと思うので、精神的にもかなり疲れます。福祉関係ニュースでは「全国で約四万人が受験した介護福祉士国家試験の実技試験で、老人にけがを負わせる危険行為」というのがありました。

職場で働いている介護士のみならず、誰一人お年寄りをバカに

私、こんな事がある事を知つて、介護職を考え直したりすることもたまにあります。しかし、私は介護職にとっても興味があるし、たくさんのお人と接したいという気持ちが強いので、また、いろいろなボランティアなどして、この職業をもっと好きになりたいです。



ことが大事です。そのために、普段の生活から仲間のことを一番に考えたいと思っています。そうすれば自然に笑顔も出るし、対等に接する事ができるんじゃないかと考えているからです。

私が今まで接してきた老人の中で、ビックリしたのは、私が一回話して終わった話題をまた、老人が何度も何度もまた、同じ話をしてきた事です。老人は物忘れが多いことは分かっていたけど、初めてその場面にそうぐうしてどうしたらいいかわかりませんでした。しかしそこで逃げるのは絶対ダメだし、話してくれることはちゃんと聞いてあげたいので、だまって聞いて何度も笑顔で返す事ができました。

私は、今まで人を亡くして悲しんだりした事はないので、命の大切さにもそれほど重みは分かりません。秋の職場体験では『親しくしていた老人が亡くなる』と、とても悲しいという事も学びました。それほど一人の老人を大切にしていた事が分かります。確かに、今まで苦労して築いてきた老人との関係が崩れるのはとても悲しい事です。私は、人が死ぬのを見るのは嫌だし、自分がつらい思いをするのは怖い事です。でも、それは介護の仕事では当たり前の事だし、ずっと悲しんでいたらやっつけけないと思えます。ですから、介護職の厳しさもある程度知つて、もっと学んでいきたいです。



合併後二回目の『飛騨市健康と福祉のつどい』と『飛騨市福祉のつどい』を開催しました。児童・生徒の意見発表の内容を聞いてみると、私たち職員が「ワークキャンプ」や「給食サービス」などの事業を企画する際に、あまり気に留めていない事に対して、児童・生徒の皆さんは、それぞれの思いで真剣に考え参加されているという事がよく分かりました。

『看護師になりたい』『介護職員になりたい』という夢を持ちながら参加されている児童・生徒の夢が、体験してからも続き、是非、実現できるように社協職員としても、施設の職員やボランティアの方と協力して今後の事業を企画していきたいと考えます。

学校で選抜されなかった皆さんにも、感謝申し上げ編集後記とさせていただきます。